

十三年目

洋書家の鹿子木孟郎氏は、結婚した當座といふもの、子供が無いのを甚く苦に病んでゐたが、巴里で祕方の藥でも授かつたものか、二度目の洋行から歸つて來ると、程なく花のやうな女の兒を儲けた。それは恰ど結婚後十三年目に當つてゐたが、其の後間もなく男の兒を生んで、今では立派な子持になつてゐる。

その初めての産があつた時、同じ畫家仲間の某が、どんな婦人でもたつた十ヶ月で爲る仕事を、畫家ともいはれるものが物の十三年

も懸つて、漸と仕上げるなんて、そんな間拔な事があるものかと、
嚴い抗議を申込んだのが、その頃の笑ひ話になつて残つてゐる。

小説家の柳川春葉氏は、大の子供好きだが、自分には子供が居無いので、狗ころや小猫を可愛がつて、お客の前をも厭はず土足の儘で上下しをするので、清潔好きのお客のなかには、氣を悪くする向きもあつたが、近頃は何うした事か、そんな物も餘り掛け構はなくなつたばかりか、友達顔を見ると、よくこんな事をいふ。

「君、僕も既う結婚後十三年になるよ。」

「へえ十三年にもなるかな。それはお慶い。」

「有難う。何しろ十三年目だからね。」

「早いもんだな。」

「ほんとにさ。十三年目なんだからね。」

「可笑しいぢやないか、十三年目が何うかしたのかい。」

「うん何だか子供が出来さうなんだよ。何しろ十三年目だからね。」

聞けば柳川夫人はもう臨月に間もない身體ださうで、お慶い譯である。春葉氏の説によると、結婚後一二年で直ぐ出来るやうな、極安手な早上りは別として、少し遅い子供は、七年目とか十三年目とか、ちやんと年期を追うて出来るものなのださうだ。

してみると、子供の無い者も、心配は十四年目から始めてもまだ遅くない。

新 畫

トルストイは「藝術とは何ぞや」といふ書物のなかで、佛蘭西の新しい詩人を攻撃しやうとして、作家連の詩集から例證をあげるのに奇抜な方法を選んだ。夫はいろんな詩集から廿八頁目の詩を引抜いて來るといふ方法なのだ。

茶話子は散歩をするのに、四つ辻へ來ると、手に持った洋杖なり蝙蝠傘なりを眞直に立てゝみて、それが倒れる方へ歩き出す事がよくある。

近頃新書の展覧會があちこちで開かれるが、作家と繪の出來榮について、何の好惡も持たない今の成金のなかには、眼を閉ちて番組を押へるとか、又は従來自分に縁起のよかつた、25とか75とかの番號に當つてゐるのを捜すとかして、夫を買取る事にさめるのがある。

そんな時には何うかすると、同じやうな買手が顔を出すもので、互に意地を張つた末が、定つたやうにぢやん拳で縁極めをする。よく新書の展覧會へ出掛けると、一つの畫幅の前で火喰鳥のやうな鋭い顔をした男が三四人、ぢやん拳をして、さやつ／＼乾燥ぎ散らしてゐるのを見掛ける事がある。

なかには地所を買ふより割高になるといつて、展覧會があると、

繪など一目とも見ようとはしないで、電話でもつて何號から何號まで、總高幾干を取除けて置いて貰ひたいと、恰で勸業債券でも買込ひやうな取引をするのがあるさうだ。

流石は結構な美術國さ。

佛 畫

早稻田大學の某氏は、近頃眞黒に燻つた佛畫を持ち廻つて、頻りと購客を捜してゐる。幾らだと訊くと、
「まあ、ずつと見切つた所で一萬圓。」

といふので、大抵の人は肝腎の佛書は見ないで、某氏の顔を見て笑つて済ましてゐる。

某氏は遅緩かしくなつて、友達仲間を説き廻つて、

「誰でもいい、この書を一萬圓に周旋つて呉れたなら、手数料として千圓位出しても可い。」

といふので、仲間の美術通や書家などは、血眼になつて得意先を駈けずり廻つてゐる。言ふ迄もなく美術通や書家などいふものは、閑暇がある代りに金銭が無い連中である。

一體佛書といふものはざらにあるが、名高い二十五菩薩來迎や山越の阿彌陀などを除けると、何れも凡作揃ひでお談話にもならぬが

美術の好きなき者には盲目が多く、盲目には富豪が多いから、下らぬ佛書に萬金を投じて悔いないのだ。

某氏の佛書はまだ見た事もないし、夫に賣物の事だから彼是言はうとも思はないが、一體何を標準に一萬圓といふ賣價をつけたのだと訊いてみると、亡くなつた岡倉覺三氏が其の書を見て、米國へ持込んだから屹度三萬圓には賣れるだらうといつた、其の一言を標準に、大負けに負けて一萬圓といふのださうな。

岡倉覺三氏は邦畫の鑑定にかけては、随分鋭い鑑識を持つてゐた人だから、那の人の鑑定つきだつたら、三萬圓位投り出す富豪があつたかも知れないが、さうかといつて今さら地獄へまで鑑定書を取

りにも往けまい。尤も大隈伯にでも頼んだら、二つ返事で地獄の門番に添書だけは書いて呉れるかも知れない。那の人は人に親切を盡すといふ事は、添書をつける事だと辨へてゐるのだから。その一萬圓が手に入つたら、件の某氏は眞面目に支那書を研究したいと言つてゐる。支那書も善いには相違なからう。人間といふものは、金銭が手に入らない間はいろん善いことを考へつくものだから。

緑 青

ある畫家の使つてゐる紅の色が、心憎いまで立派なので、仲間は吸ひつけられたやうに其の畫の前に立つた。そして不思議さうに訊いた。

『素晴らしい色彩ぢやないか、一體何店で、掘出して來たんだね。』
畫家は夫に答へやうともしないで、牛のやうに黙りこくつて、せつせと仕事に精出してゐたが、畫が描けるに連れて、身體はだんだん衰へて來た。そして仕揚に今一息といふ際どい時になつて、刷毛

を手に持つた儘、畫の前に突伏して倒れてゐた。仲間が死骸を片付
ようとして見ると、畫家は耶蘇のやうに胸に孔があいて、孔からは
眞紅な血が流れてゐた。仲間は夫を見ると、

「色彩だと思つたのは、自分の血だつたのか。」
聲を揚げて驚いたといふ話がある。

四條派の名家だつた望月玉泉が、晩年に京都のある高等女學校に
邦書の教師として一週幾時間か、酸漿のやうな眞紅な顔を覗けてゐ
た事があつた。普通の繪具は生徒が買合せの安物の水繪具で辛抱し
てゐたが、綠青と群青だけは、自分の宅から懷中へ捻ぢ込んで來
て夫を生徒に賣つてゐた。

「これは綠青と群青やで。どつちやも高い繪具やが、貴女方はお弟
子やさかい、廉う負といて、一度分五錢にしときまつさ。」

玉泉はこんな言つて、その綠青と群青とを使つた生徒からは、そ
の場で五錢宛受取つて袂に投げ込んでゐた。

生徒が草花の寫生でもすると、玉泉はじつと覗き込んで、

「よう出來よつたな。それに綠青をお塗りやすと、ぐつと引立ちよ
る、お塗りやすいな、綠青を……」

といつたやうな調子で、つい懷中の綠青を押賣する。

もしか自分の血が好い繪具になる事を知つてゐたら、玉泉さんは
綠青や群青の代りに、萎びた自分の胸を切賣したかも知れない。

畫の鑑定

或人が海北友松の畫を田能付竹田に見せた事がある。

「中井履軒さんの鑑定書がついてゐるさかい、正眞物に相違おまへんて。」

といふ自慢なのだ。竹田がその鑑定書を見ると、

「海北の畫驚目候、相違はあるまじく存候。さりながら素人の目と醫者と土藏とは眞實あてにならぬ物と聞及び候。」
と書いてあつたさうだ。

富岡鐵齋の畫を持合せてゐる男が、鐵齋の畫には随分贋作が多いと聞いて、鑑定書を添へて置いたら、賣物に出す時に便利だらうと思つて、息子さんの許に夫を持ち込んだ事があつた。

息子さんは其の男と豫ねて知り合のなかだつたが、眼鏡越しにじろりと畫を見て、ちよつと舌打をしたと思ふと、

「眞赤の贋物でさ。」

と吐き出すやうに言つた。

畫の持主は吃驚した。

「でも君、いつだつたか君の居る前で鐵齋翁に書いて頂いたんぢや無いか。夫をそんな……」

「夫をそんな……」

とは言つたが、絶念のいゝ人だつたからその儘持つて歸つて、押し入りに突込んでしまつた。

息子さんにしても少しも無理はない。世の中には忘れるといふ事がある。そしてまた鑑定達といふ事もある。

天 井 書

本阿彌光悦が書た本法寺の額は、「法」といふ字の扁が二水になつてゐるので名高いものだ。光悦はあゝいふ洒落者だけに「本法寺の

門前を流れてゐる水を、その一水に象つて、わざと然うしたのだといふ事だ。

ひかし天龍寺塔頭のある寺にあつた書院の杉戸は、探幽の筆として聞えてゐたが、戸には李白一人が書てあつて、瀧らしいものが一向に書いてなかつた。これは嵐山の戸無瀬の瀧を目の前に控へてゐるので、瀧は態と描かなかつたのだ。

池坊の祖先某は、六角堂に立花の會があつた時、自分の花に態と正心松を缺いで活けてあいた。何故だらうと夫が一座の人の噂の種となつてゐる頃、池坊は

「松は今御覽に入れます」

と云て、障子を引明けると、庭にある好い枝振の松が、うまく立花のなかに取入れられたさうだ。流石に池坊式で之には拵へ事の態とらしさがある。

竹内栖鳳氏は東本願寺の天井に、天人飛行の繪を畫く約束で、もう幾年といふもの考へ込んでゐるが、まだなか／＼出來上らない！。往時ある處に狩野永徳の描た空飛ぶ雁の間といふのがあつた。何でも襖障子一面に、葦と雁とを描き、所々に雁が羽叩して水を飛揚つてゐるのを配つた上、天井には雁の飛ぶのを下から見上げた姿に、雁の腹と翼の裏を描いて居つたといふので名高かつた。この傳で往くと栖鳳氏の天人は臍の孔から擦つたい腋の下の皺まで描かねばな

らなくなる。

畫家と商人

東京の繪畫商人の某が、京都で展覽會を開くために、ある四條派の老大家の許へ、半切の揮毫を頼みに出掛けた。高が半切だと聞いて、畫家は會はうともしない。

「先生はお忙しうおすさかい、なか／＼お出來になりまへんぜ。」と玄關番は鬨に突立つた儘、欠伸をしい／＼言つた。玄關番といふものは、主人が奥で欠伸をする時分には、自分も極つて夫をするも

のだ。

商人は四條派の書家によく金を欲しがらる持病があるのを知つてゐるから、

「それでは伺つた印に潤筆料だけ承はつて参りませう。」
と言つた。玄關番は商人の前に片手を擴げてみせた。

「半切一枚五十圓どつせ。」

商人は懐中から財布を取り出した。

「それでは茲に五十圓差上げて置きますから、お氣に向いた時に一枚御揮毫を願つておきます。」

玄關番は夫を見ると、急ににこにこ出した。

「そんなら最一度頼んだ來まつさ。なに理由を話したら先生の事やさかい、半切の一枚や二枚ちよつくらちよつと書いて呉りやはりませやろ。」

然ういつて奥へ隠れたと思ふと玄關番はまた表へ飛び出して來た

「唯今先生がお會ひになりますさかい、まあ何卒お上り……………」

今度は商人が承知しなかつた。

「折角ですが、私は繪をお頼みに上りましたんで、先生にお目に懸りに來たのではありませんから。」

と言つて、その儘すたくと歸つてしまつた。

流石に商人は目が敏捷かつた。繪は賣る爲めに註文したので、書

家に會つた爲めに賣價を崩すやうな事があつても詰らなかつた。實際畫家のなかには、その人に會つたが爲めに、折角描いて貰つた錦鶏鳥の畫までが厭になるやうな人も少くなかつた。

「先生はお忙しうおすさかい……………」

先生がお忙しいのは、先生自身に取つても、お客に取つても勿怪の幸福であつた。執方も損をしないで済む事なのだから。

畫家と書物

京都大學の某教授は日本畫家の作物を難して、畫家はどうしても

本を讀まなければ駄目だと言つたさうだ。畫家に本を讀めといふのは大學教授に鬚を剃れといふのと同じやうに良い事には相違ない。

だが、剃立の顔が學者に似合はない事もあるやうに、どうかすると本に食中りをする畫家もある事を忘れてはならない。某教授は本を讀む畫家の代表として富岡鐵齋をあげて、那の人の畫には氣品があるといつたさうだが、よしんば氣品はあるにしても、鐵齋の畫には畫家の敏感がよく出てゐない。畫家に本よりも大切なのは敏感である。

ひかし今津に米屋與右衛門といふ男が居た。富豪の家に生れたが學問が好きで、色々の書物を貪り讀んだ。珍らしい働き手で、酒男と

一緒に倉に入つてせつせと稼いだから、身代は太る一方だつたが、ただだけの物は、道修繕、橋普請といつたやうな公共事業に費して少しも惜まなかつた。亡くなつた時には方々の人がやつて来て聲を立て泣いた。なかに一人智恵の足りない婆さんが交つてゐて、おろおろ聲で、

「これ程學問してさへこんな好いお方だつたから、もしか學問などしなかつたら、どんなにか立派なお人だつたらうに。」と言つたさうだ。

婆め、なか／＼皮肉な事を言ひをるわい。

馬車の葬式

巴里の辻々にある圓太郎馬車が廢められて、自動車に代るやうになつた時、その會社員を始め、乗りつけのお客さん達が、サン、シユルピイスのお寺で乗合馬車の葬式を行つた事があつた。

舊教の坊さんが勿體ぶつて聖書を朗讀すると、會葬者は聲を合せて「アーメン」と唱へた。伶俐な耶蘇だつて、ささか乗合馬車のお葬ひまでしやうとは思はなかつたらうから、夫に相應した文句は残さなかつたらうが、巴里の坊さんは別に引導には困らなかつたらしい

何故といつて、聖書で見ると、どんな馬車だつて、人間のやうな罪の重荷は背負はなかつた筈だから。

式が済むと、圓太郎馬車は送られて火葬場へ往つた。二里餘りの道中を絹帽を被つた會葬者はどろどろと續いた。路傍の見物人は恰で名士の葬式にでも出會つたやうに、克明に帽子を脱いでお辭儀をしたといふ事だ。

日本では往時から文塚、筆塚、針塚といつたやうな物があつた。東京新聞の漫畫家が寄集まつて、島田三郎氏の漫畫葬式をやつたのも面白い企てであつた。大阪のやうな土地柄では、名妓の落籍される場合などには、以前の關係筋が寄つて集つて葬式をするのも面白い

らう。坊さんには、矯風會の林歌子女史など打つて附の尼さんだらう。那の人はお説教を聞かないでも、顔だけ見れば悲しくなりさうだから。

呂昇の咽喉

耳鼻咽喉科専門醫N氏の説によると、藝妓といふものは大抵慢性喉頭加答兒に罹つてゐる。夫は無理に聲を使ひ、無理に酒や煙草を飲み、無理に夜更しをし、無理な借錢や、無理な戀をするといつた風に、凡てが無理づくめなからださうだ。唄でも謠ふ時は鶯のやう

に滑かだが、談話をするときと曳臼のやうな平べつたい聲をするのは、咽喉を病んでゐる證據ださうだ。

N氏は一度呂昇の咽喉を見た事がある、凡て女の聲帯は細いのに呂昇のは男と同じ程度に大きく、咽喉もよく發達してゐるが、扁桃腺が非常に肥つて、どんなに最上目に見ても、健全な咽喉とは言ひ兼ねたさうだ。餘つ程扁桃腺を切らうかとも思つたが、其拍子に淨瑠璃を傷つけてもと思つて見合せたさうだ。素人の淨瑠璃は鼻の先に集くつてゐるが、呂昇のやうな黒人ののは、何處に隠れてゐるのか、醫者にも一寸判らないといふ事だ。

雲右算門の咽喉は、滅茶々に荒れてゐて、聲帯は手の着けやう

も無い。一體浪花節語りは、首を締められた野鴨のやうに、一生に一度出せばよい聲を、さらに絞り出すので誰でもが病的になつてしまふ。

先年大隅太夫が聲が出なくなつて、約束の席に差支へた時、高峰博士のアドナリンの聲帯注射を試みて、無事に席を濟ませた事があつた。これは聲帯の充血を一時的に散らすので、長い効能は無いが、女でも口説かうといふものは、その三十分前にこれを注射して見るのも面白からう。

だが、或人の説によると、そんなに手数の要る事をするよりも、その注射代だけ手土産を持つて往つた方が、屹度女の氣に入るとい

ふ事だ。

雷

梅雨が明けて雷が鳴る頃になつた。雷といへば上州あたりには、雷狩をして、捉へた奴を、料つて食べる土地があるげに聞いている。雷といふのは、多分雷鼠の事で、打捨つておくと、芋の根を喰ひ荒して仕方がないさうだ。

不思議なのは、雷狩をした年の夏は、屹度雷鳴が少いといふ事だ。この雷狩は山や野原でする許りでなく、また海つ邊でもやる。雷鼠

が、翡翠のやうに寂しい海岸に穴を掘つて、そこから顔を出して遊んでゐるのを漁師が捉まへる事がある。

政事家が餘り喋舌り過ぎて大臣の椅子から滑り落ちるやうに、雷も時偶圖に乗り過ぎて海へ落ちる事がある。さういふ折に漁師が水棹を貸してやらなければ、空へ歸る事が出来ないで、亂暴者の雷も漁師だけには極素直だといふ事だ。

京都は三方山に圍まれてゐるので、夏になると雷が多い。空がごろごろ鳴り出すと、京都の女はチョコレートを食べさせて、盞のやうにぶるぶるつと身體を顫はせる。

「貴方はん、また雷鳴どつせ。どないしまほ、妾あれ聞くと頭痛が

しまつさ。」

と言ひ言ひ、嬌へるやうに男の顔を見る。

實のところは、雷は嫌ひでも何でも無い、唯慙ういふと、男の眼に優しく美しく見られるといふ事を、女の本能から知つてゐるのだ。男は鈍いもので、此瞬間、女を飛切り美しいものに見るばかりでなく、自分をも非常な勇者のやうに思違へをする。

京の水

むかし京都で物好きな男が三四人集つて、鴨川のほとりで茶を煎

じて遊んだ事があつた。(菅茶山が言つたやうに、京都は物静かで遊ぶには持つて來いの土地柄だが、とりわけお茶と戀をするには一番都合がよい。)

水の講釋にかけては、人一倍やかましい茶人達の事として、あつちこつちの名水を瓶に入れて、各自に持寄りをする事にきめた。で、集まつた水を一つ宛煮て味はつてみたところが、矢張加茂川の水が一番美味かつたさうだ。

或る通人が夫を聞いて、

『尤も至極の事で、他所の水は、瓶に貯へて持ち寄りをしたのだから、時間が経つて死水になつてゐる。加茂川のは掬み立だけに、水

が活きてゐる。美味いに不思議はない筈だ。」
と言つた。

久保田米僊は、大阪の鱧も、京都へ持つて来て、一晚加茂川の水へ漬けておくと屹度味がよくなると言つてゐたが、米僊は私に一度も鱧の御馳走をしなかつたから、嘘か眞實か保證する限りでない。

京都俳優の随一人阪田藤十郎は、よく江戸の劇場へも出たが、その都度江戸の水は不味くて飲めないからといつて、態々飲み馴れた京の水を幾つかの大樽に詰め込んで、江戸まで持ち運んだものごさうな。水自慢は縹緞自慢と一緒に、自慢する人自身の拵へ物でないだけに面白く。

親

奥繁三郎氏の母親は九十近くの老齡で、今だに達者であるが、孝行者の奥氏は、東京へでも旅をする時には、一番に母親へ挨拶に往く事を忘れない。すると母親は、定つたやうにいふ。

「東京へお行きやす言つて、誰ぞお伴でもおすのかいな。」

「いゝえ、私一人です。」

「あんた一人で東京までようお行きやすか。」

と母親はもう涙を一杯眼に浮べて、

「繁も可憫さうに、お伴が些とも出来よらんのかいなあ。」
とそつと溜息をする。

奥氏はどんな旅行をするにも、母親の前では屹度、

「一週間旅へ往つて来ます。」

といふ。すると其の翌日から、母親はもう、

「繁はまだ歸つて来やはらんかいな。」

と訊くので、

「まだ昨日も發ちやしたのやあへんか。」

といふと、

「さうかいな、もう一週間も経つたやうに思へるさかい。」

と、其邊を捜してもするやうにうろくする。

親といふものは有難いもので、神様が人間を罪人扱ひにするのに
比べて、親はいつ迄も其の子を子供扱ひにする。親が神様になつて
は可けないやうに、神様も親になつては可けないが、親には神様が
真似の出来ない長所がある。夫は子供の爲には「馬鹿」になるといふ
事で、神様より人間の偉い點は確にこゝにある。丁度「愚痴」を持つ
てゐる女が、夫を持合はさない男より強いやうなものだ。

帽子

英國の文豪キプリングが、ある時米國の雑誌が見たいから、五六種送つて欲しいと、紐育にゐる友達の許へ頼んでよこした事があつた。

米國の雑誌は、いづれも廣告の頁がどつさりあるので知られてゐる。キプリングの友達は、幾らか郵税を節約したい考へから、廣告の頁だけ引裂いて、残つた内容を一纏めにして送つて寄した。

キプリングは包みを解いてみると、雑誌はみんな廣告の頁だけ引

き裂かれてゐる。何故だらうとキプリングは小首を傾けたが、それが郵税の節儉からだと聞いて、文豪はぶつぶつ憤り出した。

キプリングの言い條では、米國の雑誌は廣告欄が面白いので取柄がある。内容と廣告と孰方に新智識が多いと訊かれたら、誰だつて選擇に迷はない筈だ。

「そんなに郵税が節儉しなかつたら、内容の方だけ引裂いて呉ればよかつたに。」と、友達まで不平を申込んださうだ。

世の中には米國の雑誌みたいな人も少くない。法隆寺にゐる北畠男爵などはその一人で、暴風のやうな那の人一流の法螺は一寸困り物だが、夏帽だけはパナマの良いのを着けてゐる。もしかキプリ

グの友達ともだちのやうに、郵税ゆうぜいを節儉しよけんしなければならぬとする、「男爵」だんしやくは捨て、しまつても、那あの帽子ぼうしだけに撰えらびたいものだ。

玄 關

そのひかし、池大雅いけのだいがが眞葛原まぐつがはらの住居すまひには、別に玄關げんくわんといつて室むろも無かつたので、軒先のきさきに暖簾のれんを吊つるして、例れいの大雅たいが一流りうの達者たつしやな字じで「玄關」と書かいてあつたさうだ。上田秋成うへだあきなりが南禪寺常林庵なんぜんじじやうりんあんの小家こいへにも、入口いりぐちに暖簾のれんをかけて、「鶉屋うづや」とたつた二字じが認しんめてあつたといふ事だ。

拗ね者おねものの金龍道人きんりゆうだうじんは、自分じぶんの戸口とぐちに洒落しゅれた一聯れんを懸かておいた。聯れんの文句もんくは恚いかういふのだ。

「貧乏ひんぱふなり、乞食物こじきもの貰もらひ入いる可べからず。」

「文盲もんもうなり、詩人墨客しじんぼくかく來きる可べからず。」

乞食物こじきもの貰もらひも五月蠅ごがつぶくない事こともないが、それでも詩人墨客しじんぼくかくよりはまだ愈ましな場合ばあひが多おほかつた。何故なぜといつて、乞食こじきは物ものを呉くれて遣やれば、素直すなはに歸かへつて往ゆくが、詩人墨客しじんぼくかくは自分じぶんが納得なつとく出來きるまで、無駄話むだわを押賣おしうしないでは滅多めつたに歸かへらなかつたから。

自分じぶんの知しつてゐる某氏ぼうしは他よその家うちへ出入でいりをするのに、がらりと入口いりぐちの扉ふたを開あけはするが、その手てで滅多めつたに閉しめた事ことは無ない。尤もつともこれに

は主義のある事で、自分が出入するのに、扉は是非開けなければならぬが、夫を閉めて置かなければならぬ何等の理由も発見出来ないからださうだ。恁ういふ來客に取つては、大雅や秋成のやうな暖簾の玄關は手数が要らないで可い。

墓 石

亡くなつた市川齋入は茶人だけに、紫野の大徳寺にある千利休の塔形の墓石に甚く感心をして、
「成程、那の墓石に耳を當てがふと、何時でも茶の湯の沸る音がし

てまんな。私も俳優甲斐に洒落た墓石が一つ欲しうおまんね。」
と言つてゐるので、或人が、

「君は幽霊や宙釣りが巧かつたから、墓石にも一つケレンを仕組んでみたら何うだい。」
と冷かすと、

「阿呆らしい。」

と皺くちゃな顔を歪めて脆くれたさうだ。

だが、夫は齋入が物を識らないからで、徳川時代の洒落者の多かつた江戸町人の墓石には、故人が好物の形に似せた墓も少くなかつた。碁好きの墓に臺石を碁盤に拵へ、碁筒を花立に見立てたのや、

酒飲みの墓を徳利形や、酒樽形に刻んだのもあつた。可笑しいのは賭博が好きだつたからといつて、墓石に骰子の目まで盛つたのがあつた事だ。夫を考へて伴の右團次も亡父の墓を幽霊の姿にでも刻んだら面白からう。

風 薬

蚯蚓が風邪の妙薬だといひ出してから、彼方此方の垣根や塀外を穿くり荒すのを職業にする人達が出来て来た。郊外生活の地續き猫の額ほどな空地に十歩の春を娛まうとする花いちりも、慙ういふ

輩に遭つては何も角も滅茶苦茶に荒されてしまふ。

箏曲家の鈴木鼓村氏は巨大胃を有つた男として聞えてゐる人だが、氏は風邪にかゝると、五合飯と味噌汁をバケツに一抔食べて、夫から平素餘り好かない煙草を暴に吸ふのださうな。

『さうすると、身體ぢうの何處にも風邪の匿れる場所が無くなつてしまふ。』

と言つてゐる。

昆虫學者として名高い、夫がためにノオベル賞金をも貰つた佛蘭西のアンリ・ファブル先生は、いつも風邪をひくと、自分の頭を灰のなかに突込むといふ事だ。すると一頻り咳が出て風邪はけろりと

癒つてしまふ。

「随分荒療治ですな。」

と或人がいふと、ファブル先生濟ましたもので、

「何でもありません。一寸風邪のお葬式をやつたのです。」

強制妊娠

獨逸では戦争から起る人口の減少を氣遣つて、戦線に立つてゐる元氣な壯丁に、時々休暇を呉れて郷里に歸らせ、婦人と見れば無差別に子種を植付けようとしてゐる。

先日京大のM博士と大阪大学のK博士とが或所で落合つた時、K氏がこの話を持ち出して、

「まさかとは思ふが、眞實か知ら。」

といふと、M氏は自分がその下相談にでも與つたやうに、

「眞實だともさ、實際行つてるんだよ。」

ときつぱり答へた。

「でも……」とK氏は兎のやうな長い耳を一寸傾げた、

「戦線に立つてる兵士の多くは、女房や娘やを持つてるだらうが、自分の家族がそんな目に遭つてるのを、黙つて辛抱出来るだらうか知ら。」

「それは出来やうともさ、國家の爲めだからね。」

とこの齡まで細君をも迎へず、一人で研究室に閉ぢ籠つてゐるM博士は、モルモットの話でもしてゐるやうな平氣な調子で言つた。

「兎に角行つてるのださうだ。」

「だが、まあ考へてみ給へ。」

K氏は大きな掌面で汗ばんだ鼻先を一氣に撫て下した。鼻はその邪慳さに腹立でもしたやうに眞赤になつた。

「もしか君自身に奥様やお嬢さんがあるとして、君はその人達が、そんな酷い目に遭つてるのを、平氣で辛抱してゐられるかね。」

「然うさなあ。」

とM氏は初めて氣がついたやうに、K氏の眞赤な鼻先を見つめた。そして、

「吾輩自身の事にしてみると……」

と獨語のやうに言つてゐたが、急に笑ひ出した。

「成程こいつは逆も辛抱出来ないわい。してみると、獨逸もそんな亂暴なことは行つて居らんかな。やつぱり噂だけで、眞實は行つてないんだらうて。」

學者に教へる。帽子を買ふ時には自分の頭に被つてみる事だ。履物を買ふ時には自分の脚に穿いてみる事だ。そして男女問題は眞先に自分の細君に當てはめて考へてみる事だ。唯こんな場合には醜い

細君よりは、美しい方がずつと恰好なものだ。丁度帽子を被る頭は、
禿げたのよりも、髪の毛の長いのが恰好なやうに。

狸

中橋徳五郎氏は頻と狸の焼物を集めてゐる。京都の高臺寺焼を始め、
いろんな瀬戸物屋へ自分で出掛けて往つて、狸だを見ると値段
を問はず買ひ込んで来るので、今では百幾つも溜つてゐるといふ事
だ。

成程よく見ると、中橋氏の顔はどこか狸に肖たところがある。然

ういつた所で何もむきになるにも及ぶまい。ソクラテスに、

「先生のお顔は、ブルドックに肖てますね。」

といつた處で、まさか決闘を申込はしなかつたらう。それどころか
那の哲學者の事だもの、

「そんな狗がどこに居るね。」

と其の足で直ぐ訪ねて往つて、幼昵懇のやうに狗と一緒に轉げ廻つ
たかも知れない。

中橋氏は實業家（氏は今ではもう政治家の積りかも知れない、恰
ど水蠱が鹽辛蜻蛉になつたやうに）には珍しく書物を読むが、狸に
しても文字をよく知つてゐるのがある。むかし植木玉匠の親類に居

た狸などは其のいゝ例である。

この狸は家の者の見ぬ間には、下手な字で障子襖に皆の棚下しをする。

「誰こわくない」「誰少しこわい」

といつたやうな調子で。ある時來客がその噂を聞いて、能勢の黒札を狸が怖がる話をする、いつの間には後の障子に、

「黒札こわくない」

と書いてゐたさうだ。

その家の女房が、芝居の八百藏が大の最良だつたが、その頃不入續きで悄氣てゐると、狸は、

「八百藏大へいこ」

と書いて済ましてゐたさうだ。

中橋氏の狸も例の金澤の選舉無効を聞いて、

「徳ちゃん大あたり」

と書く位の洒落氣はあつてもよからう。

節用集を食ふ

先日七十三の老齡まで、女遊びをしたといふ西依成齋の事を書いたが、成齋の生れた家は、熊本在の水呑百姓で、両親は朝風くから

先日七十三の老齡まで、女遊びをしたといふ西依成齋の事を書いたが、成齋の生れた家は、熊本在の水呑百姓で、両親は朝風くから

肥桶を擔いで野良へ仕事に出たものだ。

そんな間に育ちながら、成齋は野良仕事を助けようとはしないで日がな一日青表紙に嚙りついてゐた。親爺は幾度か叱り飛ばして、漸と芋畑に連れ出しはしたが、成齋は鮎のやうにいつの間にか畑から滑り出して、自分の家に歸つてゐた。百姓だけに仇花は拗つて捨てるものと思ひ込んだ親爺は、とうと成齋を家から投げ出す事に決めた。

成齋は泣く泣く家を出たがそれでも出かけに節用集一卷を懐中に捻ぢ込む事だけは忘れなかつた。節用集といつただけでは今時の若い人には解らないかも知れない。ある大學生が國史科の教授に、

『先生赤穂義士の仇討といふのは一體京都であつた事なんですか、それとも東京なんですか。』

と訊いた事があつたといふ程だから、節用集といふのは今の小百科全書の事だと言ひ添へて置きたい。

成齋はその節用集を抱へ込んで、狗兒のやうに鎮守の社殿の下に潜り込んだ。そして節用集を読み覺えると、その覺えた個所だけは紙を引拗つて食べた。書物を読み覺える頃には、腹もかなり空いてゐるので、節用集はその儘飯の代りにもなつた譯だ。で、十日も経たぬ間に、とうと大部な節用集一冊を食べてしまつたといふ事だ。灰屋紹益は、自分が生命までもと思ひを掛けた吉野太夫が死ぬる

と、その骨を墓のなかに埋めるのは勿體ないからと言つて、酒に混ぜてすつかり飲み盡してしまつた。

だが、恚ういふ事は餘り眞似をしない方がいゝ。今時の書物は鵜呑にすると、頭を痛めるやうに胃の腑をも損ねる。それから女の骨を飲むなどは以ての外で、四十九日目に箆笥の抽斗から、亭主をこき下した日記を發見たからといつて、一度嘔み下した後では、何うとも仕兼ねるではないか。

そして、そんな女なぞ居ないと誰が請合ふ事が出来るのだ。達て嘔みたかつたら、三回忌を過ぎてからでも遅くはない筈だ。

角田川

大阪美術倶楽部で催された故清元順三の追悼會に、家元延壽太夫が順三との幼馴染を懐ひ出して、病後の窶れにも拘らず、遙々下阪して來たのは美しい情誼であつた。

延壽太夫はその席上で、「角田川」を語つた。清元としては甚く上品なもので、何も判らない聴衆は、何れも手を拍つて喜んでゐたが、自分は獨り欺かたやうな氣持がしない事もなかつた。

意氣で、うまみで持てゐる清元を、強て上品に拗曲やうとするの

は寧ろ當流音曲の自殺である。四代目お葉は二代目の不思議な横死が、富本の手で行はれたかも知れないといふ疑一つで、富本の紋章に縁のある櫻の花は、生涯家に植させなかつた程だ。家の藝が自分で首を縊らうとするのを見たら、どんなに言ふだらう。

先代の延壽は道樂といふ道樂を仕盡して、とどの果には舌切情死までしやうとした。さういふ遊蕩的分子をその血にたんと持傳へてゐたから、舌切雀のやうに情死で損じた舌をも、何うにか工夫して獨吟となると、聽客の魂を吸ひつけるやうな離れ業も出來たのだ。清元に無くて叶はぬものは、この遊蕩的分子である。

今の清元は、所謂上流夫人といふ階級の氣に入らうとして、清元を

「角田川」のやうなお上品なものにしやうとしてゐる。今の上流夫人の好くものは、お手製の西洋菓子と、オペラ袋と、新音曲と——執れもお上品で軽い物づくめである。

記者回む

トルストイ伯は、その名著「アンナ・カレニナ」のなかで、塞爾維對土耳其の紛紜から、もしか戦争でもあつ始まるやうだつたら、筆一本で喧しく主戦論を吹き立てた人達だけで、別に中隊を組織して一番前線に夫を使ふ事にしたい、「すると屹度素晴らしい中隊が出來

る。」

と皮肉を言つてゐる。

イダ・ハステッド・ハアバア女史といふと、婦人參政權の賛成論者として相應名を賣つてゐるが、この女が最近紐育の有名な新聞記者に會見を申込んで來た。それはこの記者を生擒にして、新聞紙の上で熾に賛成論を書き立てさせたら、屹度効力があるだらうと思つたからだつた。

「婦人參政權ですつて？ 今時そんな下らない……」と新聞記者は吐き出すやうに「もしか私達の國が歐洲戰爭に引張り出されるとして誰が武器一つ取る事を知らない輩に投票なんかするもんですか。」と

そつ氣なく言つたが、相手の險しい顔色を見ると、一寸調弄つて見なくなつて「奥様、貴女だつたら何うなさいます、もしか戰爭でも始まりましたら。」

「はい、貴方のでしてゐらつしやる通りに遣りますわ。」と夫人は急に雌馬のやうに鼻息を荒くした。「お國の爲めだからつて、他の人達はみんな戦線に立つて血を流すやうに書き立ていさ。そして自分一人は編輯室の安樂椅子に踏ん反りかへつて居ませうよ。」

茶

話終

大正五年十月三日印刷

【定價金六拾錢】

茶話



不許複製

著者

薄田淳介

發行者

河本龜之助
東京市麹町區平河町五丁目三十六番地

印刷者

河本俊三
東京市麹町區隼町二十番地

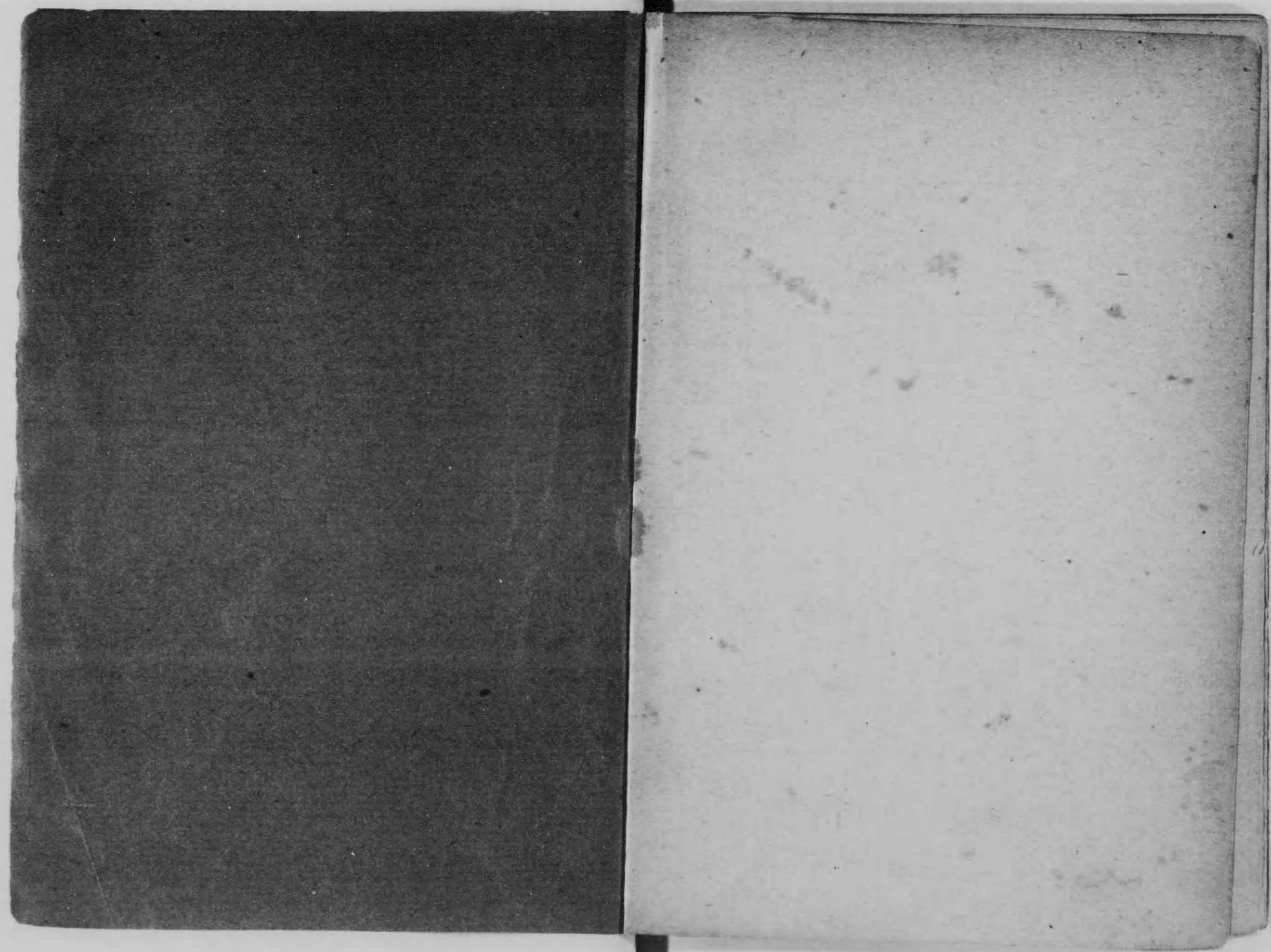
印刷所

洛陽堂印刷所
東京市麹町區隼町二丁目九番地

發行所

電話番町四二五八
振替東京二〇九一四

東京市麹町區平河町
洛陽堂
五丁目三十六番地



終

